

トピック — ねぎの需要動向について —

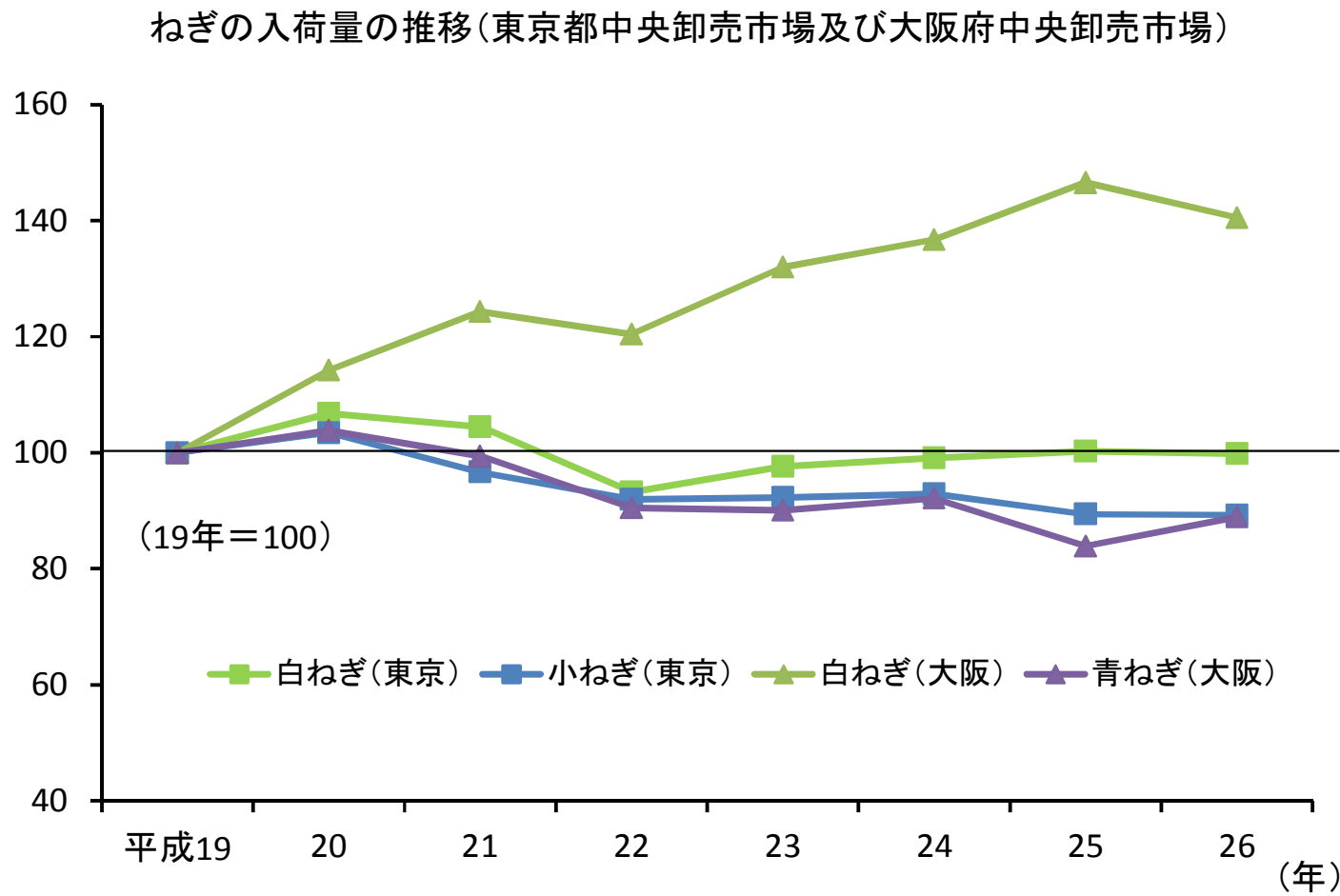
今回は、葉茎菜類の中でも、キャベツ、たまねぎに次ぐ作付面積で、また旬でもあるねぎの需給動向について紹介する。

ねぎは、大きく分けると、根深ねぎの「白ねぎ」と葉ねぎの「青ねぎ」に分けられる。白ねぎの代表的なものとして深谷ねぎ（埼玉県）、青ねぎの代表的なものとして九条ねぎ（京都府）などがあり、これまで、関東の白ねぎ、関西の青ねぎが一般的ではあったが、この傾向にも変化が見られる。大阪府中央卸売市場における白ねぎと青ねぎの入荷量の推移を見みると、白ねぎの入荷量が増加しており、関西でも白ねぎの消費が増加していることを示している。人や物の移動が激しい中で食文化についても変化が進んでいることが分かる。

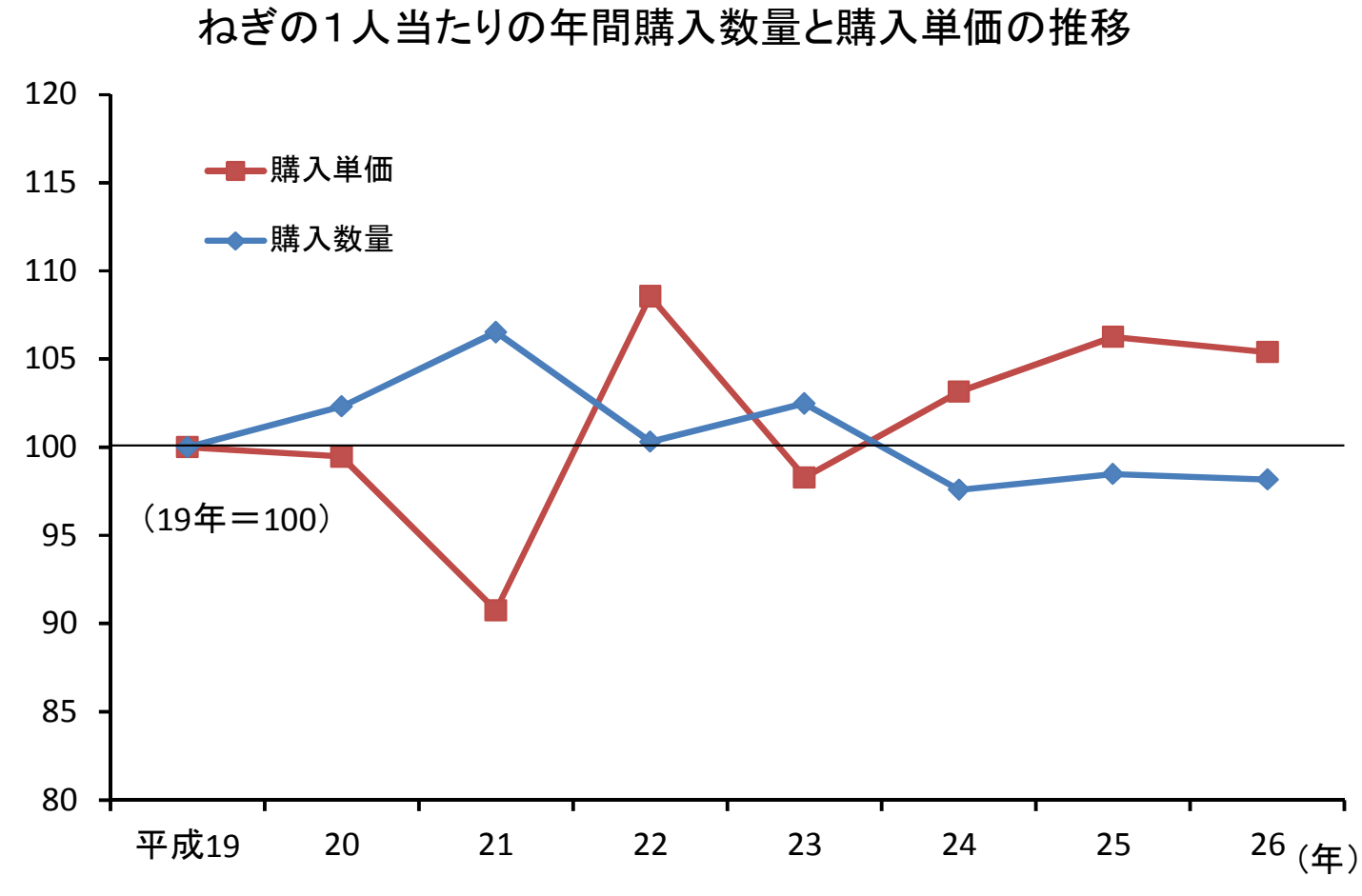
総務省「家計調査報告」によると、1人当たりのねぎの購入量は、平成21年の1771グラムをピークに、減少しているものの、最近では1630グラム前後で推移している。また、1人当たりの年間購入量と購入単価を見ると、購入数量と購入単価は負の相関関係を示しており、消費者が価格に強く反応していることが見られる。

26年のねぎの作付面積は2万2900ヘクタール、出荷量は38万3900トンとなっている。作付面積は微減傾向で推移しているものの、天候不順により出荷量が大きく減少した22年以降、出荷量はややもち直してきている。産地別に出荷量の推移を見ると、千葉県、埼玉県及び茨城県の関東3県で全国の4割を担っており、西日本では、大分県が国東半島北西部の干拓地でねぎを栽培して西日本有数の生産地となっている。

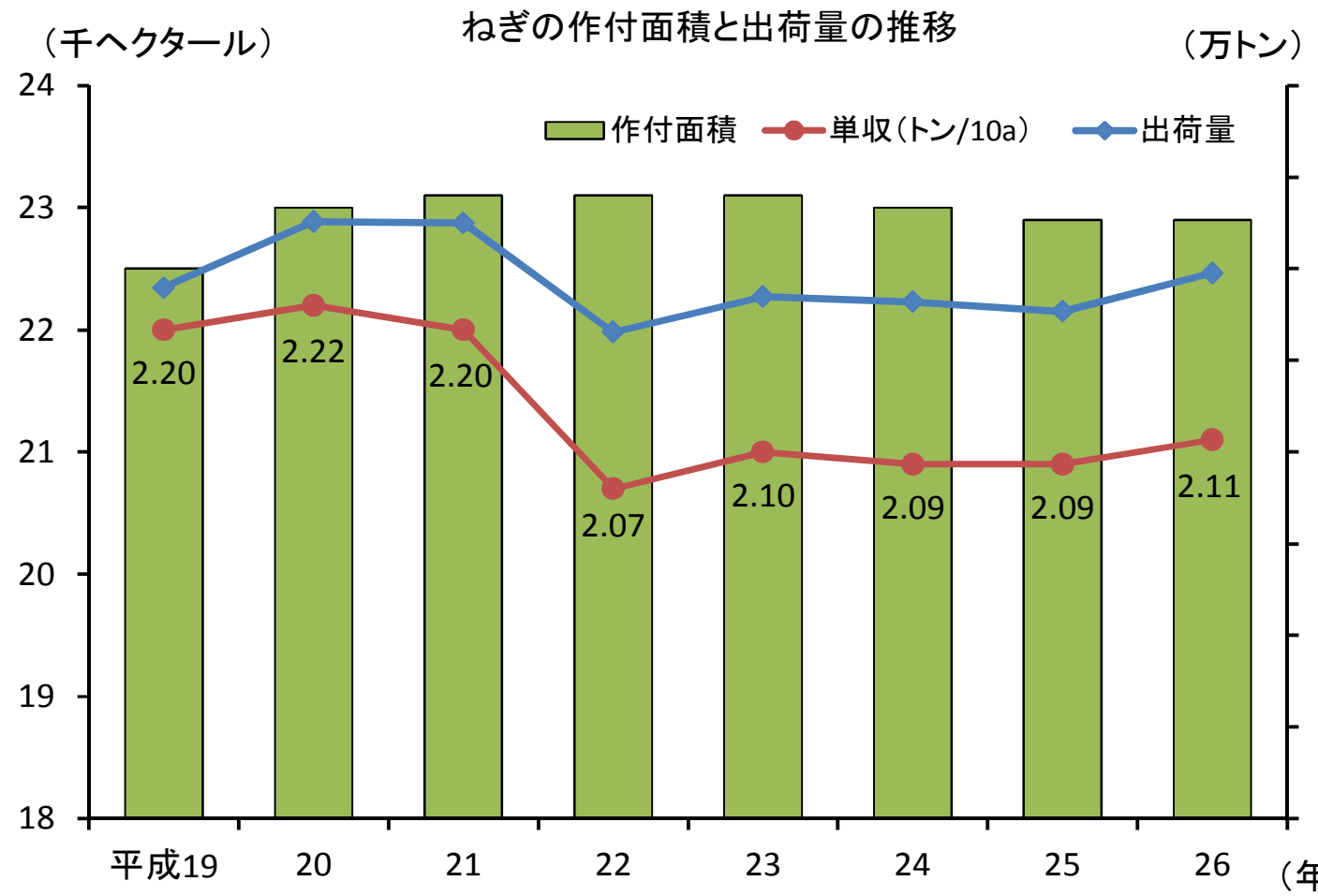
ねぎの産地動向は、22年を境に指定産地と指定産地外で様相を異にしている。指定産地外では生産者の高齢化などで作付面積が微減傾向で推移している中、指定産地では、新規就農者の育成などにより作付面積を伸ばしている。また、最近では、秋冬ねぎの指定産地が春ねぎを導入し、出荷期間を延ばしている。こうした中で、野菜価格安定制度は、生産者の所得安定及び産地の維持拡大に寄与しているものと思われる。



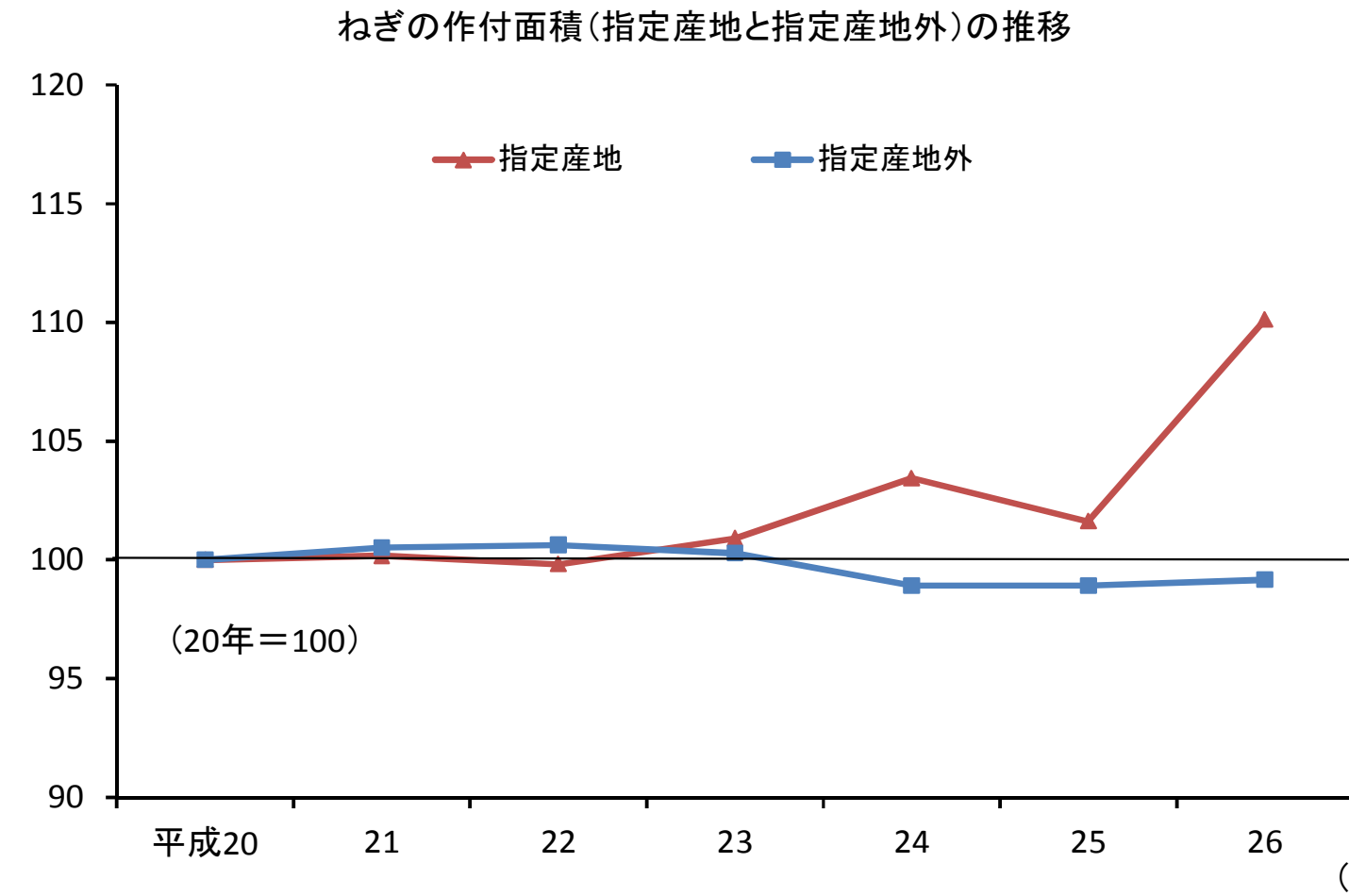
資料:ベジ探(原資料:東京・大阪「市場月報」)



資料:ベジ探(原資料:総務省「家計調査」)



資料:ベジ探(原資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」)



資料:ベジ探(原資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」)